

職人の世界には、  
これでお仕舞いという  
到達点などない



茂上豊さん

たるところに置かれた数々の道具類だ。

「指物で使う道具は、基本的に鋸、鉋、鑿の3種類。ただ、鉋だけで100種類以上あって、職人はそれを自分なりに改良し、仕事に応じて使い分けていくんです」

江戸指物は、木取りに始まり、木削り、ほぞ加工、組み立て、漆塗り、金属取り付けなどという工程すべてをひとりの職人が手作業で行なう。そのため、職人の個性がそのまま反映される。「たとえば、鏡台をつくってほしい」という注文が入るでしょう。で、お客さんの好みや用途、予算を聞いて仕事に取り掛かる。ただ、お客さんが現物を見るのは納品のときが初めてということになりますから、結果がすべて。私らにとっては一つひとつの仕事がすべて真剣勝負なんです」

だからこそ、客が代金を支払いながら、満足した表情を浮かべ「ありがとう」という言葉を添えてくれる瞬間は、文字どおり「職人冥利に尽きる」という。

◇ 茂上さんが職人の世界に飛び込んだのは、大学を卒業してから。 「東京大空襲で先代が亡くなり、父が二代目として跡を継いでいたこともあり、いずれは長男の私も……という漠然とした思いがありました。

ただ子供の頃からボーイスカウトに入っていてキャンプや旅が好きだったので、放浪の旅、というのに憧れましてね。で、父にお願いして4年だけ待ってもらったんです」

在学中にはアメリカやヨーロッパの各地をキャンブしながら回り、卒業と同時に約束どおり父親に弟子入りすることになる。

とはいえ、職人の世界は「見るのと、やるのでは大違だった」と茂上さんは振り返る。「この仕事に就いて改めて知ったのが、木は切り倒しても生きているということ。季節によって常に収縮を繰り返すので、常にそこを考えてつくらなければならぬんです。でも、最初そんなことはわかりませんからね。よく親父からは『お前は先が読めないからダメなんだ！』と棒切れで殴られたもんですよ」

# 王 伝統の手技

第十二回

江戸幕府が  
京都から職人を呼んで  
つくらせたのが  
「江戸指物」の始まり。  
その伝統を今に受け継ぎ、  
名品を世に出し続ける茂上豊さん。

分業が珍しくなくなった職人の世界。だが、そんな風潮に抗うかのように、たったひとりですべてを完成させていくのが江戸指物。そこには全身全霊の技と魂が宿る。



完成品の各種。

使い込むほどに  
なじんでいく指物

シャツ、シャツ、シャツ、シャツ、カンカンカン……。

小気味いいリズムを刻みながら、透き通るほど薄いカンナ屑がみるみる山になっていく。胡坐をかいた眼光鋭い男性が時折、片目をつぶり、目の高さまで上げたカンナの刃を金槌で叩く。その乾いた金属音が、木の匂いに包まれた作業場に響き渡っていた――。

今もなお、下町情緒が残る東京・蔵前。そんな街の一角で工房を構えるのが、江戸指物の匠として知られる茂上豊さんだ。

指物とは金釘を一切使わずに、「ほぞ」や「組み手」といった伝統の技法で簞笥や、飾り棚、文机などをつくる伝統工芸のこと。

語源は、指し合わせる、物差しを使い精巧に組み合わせる、いく、という両方の意味からきているといわれる。

指物は大きく分けて「京指物」と「江戸指物」に分かれる。茂上さん曰く、

「京都の指物は朝廷文化や茶道とともに発達したもので、装飾も雅で華麗なものが多く。一方、江戸指物は徳川家康が江戸に幕府を作ったときに、関西から職人を呼んで日本橋辺りに住ませたのが始まりなんです。でも、八つっあんや熊さんが住んでいたような長屋では家具が必要なかったため、一般庶民の生活に入ってきたのは、江戸中期になってから。武家や商人、歌舞伎役者などに愛用されて広まっていたようです」

木目や色合いなど、木の持つ美しさを生かしたシンプルな仕上げを身上とする江戸指物は、生漆の塗りと拭きを何度も繰り返す「拭き漆仕上げ」という独特の塗装を施し、金物も取手部分など最小限で使用するのみだ。

「ただ、今は伝統工芸品といわれていますが、当時は使い勝手のいい道具として庶民から愛されたわけですからね。指物というのは、使い込むほどに手になじみ、住まいになじんでいくものなんです。

つまり人の手が、味のある色合いを深め、さらに使い勝手をよくしていく。それが江戸指物の魅力なんです」

◇ 二階にある工房に案内されて、まず驚かされるのが、室内の戸に幕府を作ったときに、関西から職人を呼んで日本橋辺りに住ませたのが始まりなんです。でも、八つっあんや熊さんが住んでいたような長屋では家具が必要なかったため、一般庶民の生活に入ってきたのは、江戸中期になってから。武家や商人、歌舞伎役者などに愛用されて広まっていたようです」





代表的な鋸。上から順に両刃、柄引き、胴付き、縦引き、横引き、畦引き、廻し引きの各種鋸。



鑿の種類。箱に入っているのが叩き鑿12種。箱の外に置かれているのが突き鑿4種。



一般的な鉋。上が長台鉋、下の2つは平鉋。

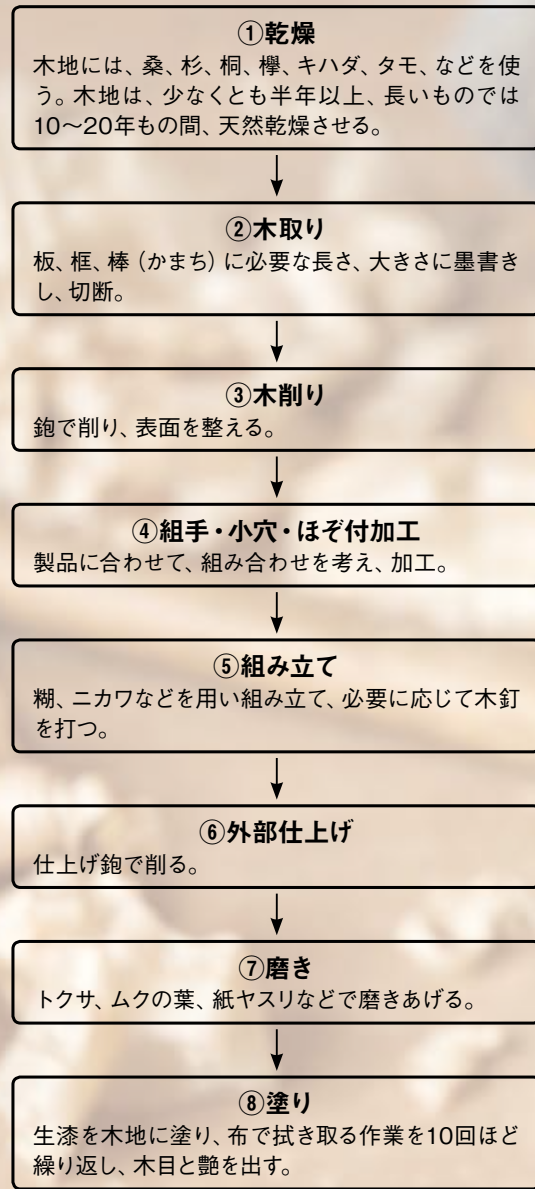


同じ鑿と鋸が、30~40年使うと上と下のようになるという驚き。



特殊な部分に使う変り鉋の各種。木角を削ったり、ほぞを削ったりする。

道具を自分なりに改良し、ひとりですくりあげるのが指物



## 茂上 豊

Mogami Yutaka



1953（昭和28）年生まれ。1975（昭和50）年に大学を卒業後、江戸指物師の父、豊二郎氏に師事。厳しい修業を経て、表面から家具の組手が見えないように内部に組み接ぎを施す「留型隠蟻組（とめがたかくしありくみ）ほぞ」という技法を習得。1990（平成2）年には東京都伝統技術功労賞を受賞。1995（平成7）年、三代目として茂上工芸の代表に就任後は、伝統の技と現代の移住空間に合わせたコラボ作品を次々に発表。作品は、ワインキャビネットをはじめ、飾棚・文机・宝宝箱・姿見と多種にわたるが、中でも指物の細工が施されたオリジナルの蝶ネクタイはパリコレでも使用され話題になった。1998（平成10）年、台東区優秀技能者に認定、2000（平成12）年には通商産業大臣（旧）認定資格「伝統工芸士」を授与。小説『鬼平犯科帳』の大ファンで、長谷川平蔵を尊敬する一方、スキーやキャンプなど、アウトドア派の粋人でもある。また昨年には台東区の道名募集に応募し、工房前の道を「川柳横丁」と名付け、地元小学校では川柳大会を開催するなど地域に根ざした活動も続けている。

茂上工芸：  
東京都台東区蔵前4-37-10  
TEL：03-3851-6540  
<http://sasimono.ciao.jp/>

◆ 昨年12月、赤坂の劇場で明治から昭和を生きた指物師、茂上恒造さんの物語が「耳よりな：朗読会」（斎藤隆介著『職人衆 昔ばなし』より）で朗読された。恒造さんは茂上さんの大叔父で、

※木の持ち味を最大限に活かすことを身上とする江戸指物で多く使われるのが、桑、杉、桐、樺、キハダ、タモといった広葉樹。なかでも、御蔵島や三宅島で採れる島桑は硬く粘りがあり、細工の際には木崩れしないことから、工芸素材として格が高く人気があるという。



鉋をかける茂上さん。「江戸指物」は左脚を伸縮させて作業をするのが特徴。腰に負担がかかるそうだ。

だが、厳しい修業は茂上さんに指物職人としての技術だけでなく根性もきっちり叩き込んだ。そして平成7年、茂上さんは父の工房を継ぎ三代目に就く。むろん、修業で培った仕事に対する思いは、現在も変わることはない。

昔ながらの「伝統」に胡坐をかきながらも、「江戸の粋」を守りながらも、現代のライフスタイルに合わせた「小粋モダン」を追求する茂上さん。

「木目にはなんともいえない自然の温かみがあります。江戸指物は、そんな素材をもとに、お客さんと同じ言葉で交わしながら、機械ではなく手作業でつくってあげていきます。そして職人の手からお客さんの手へと渡っていく。指物を使う人の心にも体にも優しい生活道具、といわれるのは、そんな由縁なのかもしれないですね」

当時の花柳界や歌舞伎役者から絶大な支持を受け、歌人の柳原白蓮の花嫁道具一式も手がけた、まさに江戸指物の名工だった。

「私が先達たちから学んだのは、職人の世界には、これでお仕舞いという到達点がないということ。そのためには、常に勉強して自分を磨いておかなければなりません。気持ちのなかに少しでも妥協が生まれると、それがすぐに仕事に表れますからね。そんな中で、決められた納期と予算を守りながら品物を仕上げていく。

だから、自分の思い通りのものができて、お客さんが喜んでくれたとき、これ以上の喜びはないんですよ」

苦勞の先にある喜びを求めて――。シャーツ、シャーツ、シャーツ……。静寂のなかで再びカンナの音が響き渡った。